

内水面域振興活動推進事業（海産稚アユ分布調査）

中西尚文・神谷直明・下村耕史

目的

本県の放流アユは疾病や安定供給等の問題を抱える琵琶湖産アユや県外の海産稚アユが多くを占めている。しかし本県の沿岸域でも稚アユは分布し、より詳細な知見を得ることで放流用種苗として有効活用できる可能性がある。そこで、海産稚アユの分布・出現状況とその採集漁具について調査研究を行う。

方法

1. 採集調査

稚アユの採集は、伊勢湾北中部の砂浜海岸である高松(川越町)、吉崎(四日市市)、白子(鈴鹿市)、白塚(津市)、大淀(明和町)の砕波帯において、12~3月に月1回行った(図1)。採集には砕波帯ネット(高さ1m×幅4m、目合い1mm、中央部は袋状)を用い、水深1m以浅の砕波帯を岸に平行に曳網した。曳網距離は1回を50mとし2回実施した。採集した稚魚は10%海水ホルマリンにて数時間固定後、99.5%エタノールにて保存した。計数や計測はエタノールによる収縮が終わる1ヶ月以上を経過した後実施し、曳網ごとに1~100尾の標準体長をノギスを用いて測定した。

2. 採集漁具・漁法調査

2月7日に漁期中の静岡県浜名湖で視察を行い、海産稚アユ採捕にかかる各種取り決め事項のほか、当地で使用されている採集漁具とその技術、蓄養技術、出荷、問題点などの情報を収集し整理した。

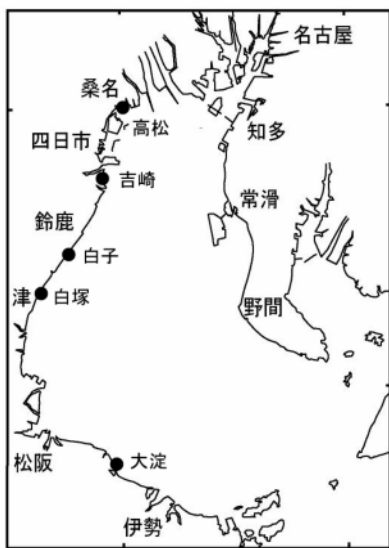


図1. 採集調査側点図

結果および考察

1. 採集調査

砕波帯ネットによる採集結果を表1に示した。4ヶ月間で計3,128尾採集された。3月を除いて吉崎海岸における採捕尾数が最も多かった。調査月・調査地点・曳網回ごとの曳網距離当たりの採集尾数は12月で0~1.9尾/m、1月で0~9.6尾/m、2月で0~2.2尾/m、3月で0~4.7尾/mと大きな幅がみられた。稚魚の体長を図1に示した。採集した稚魚の体長は、6.7~75.0mmの範囲であった。なお、体サイズの大きな稚魚は逃避により砕波帯ネットでは採捕できないため、本調査にて採捕できた群れの体サイズは本来生息する群れより小さいと考えられる(参考：平成19年3月1日の白子出荷時の体長は約40.7mm)。

12月から2月に調査した昨年度は白子海岸での採捕尾数が毎月最も多く、吉崎海岸は12月、1月、2月でそれぞれ1尾、3尾、319尾と今年度と違う傾向を示した。砕波帯ネットによる定量評価は難しいといわれるが、採捕の安定性の観点からみれば、昨年同様、白子海岸付近が漁獲候補地としては最適だと考えている。

表1. 砕波帯ネットによる採集結果(尾数)

月	調査日\調査海岸	高松	吉崎	白子	白塚	大淀
12月	1回目	0	65	69	3	0
	2回目	0	97	13	4	1
	合計	0	162	82	7	1
1月	1回目	0	480	70	1	0
	2回目	0	38	75	2	0
	合計	0	518	145	3	0
2月	1回目	0	101	32	9	0
	2回目	0	94	108	36	0
	合計	0	195	140	45	0
3月	1回目	0	40	236	119	79
	2回目	0	27	20	3	8
	合計	0	67	256	122	87

2. 採集漁具・漁法調査

静岡県では需給調整を円滑に実施するため、県内水面漁連が事務局となり協議会を設置している。現在、浜名漁協には地区ごとに5つのアユ採捕組合があり、計5ヶ統が操業している。箱メガネで群れを探し、船外機で移動して地曳網を操業する形態がほとんどである。毎年12月中旬から2月末までが漁期のため、約0.5g/尾(全長約25mm)のシラスアユから漁獲対象にしているのが特徴である。蓄養は各採捕組合とも陸上水槽で行われる。入札については漁協が仲介し、原則として毎週火・金曜日

に蓄養場所で開催されている。浜名湖周辺の4軒の養殖業者が入札し、すべて養殖用として供される。

近年、三重県内水面漁連が試験的に稚アユ漁獲を依頼している白子地区では、2月中旬以降に港内で敷網を使い採捕し、陸上水槽で蓄養している。現在の操業形態では、従事者が兼業のイカナゴ漁の準備やクロノリ養殖の片付けに忙しく、積極的に操業しているとは言い難い。一方、シラスアユは12月には白子海岸に分布していることから、白子地区における操業時期を1月以前に早めることも検討して良いと考える。

関連報文

静岡県浜名湖における海産稚アユの取り扱いについて、
三重県科学技術振興センター水産研究部鈴鹿水産研究室、
平成20年2月

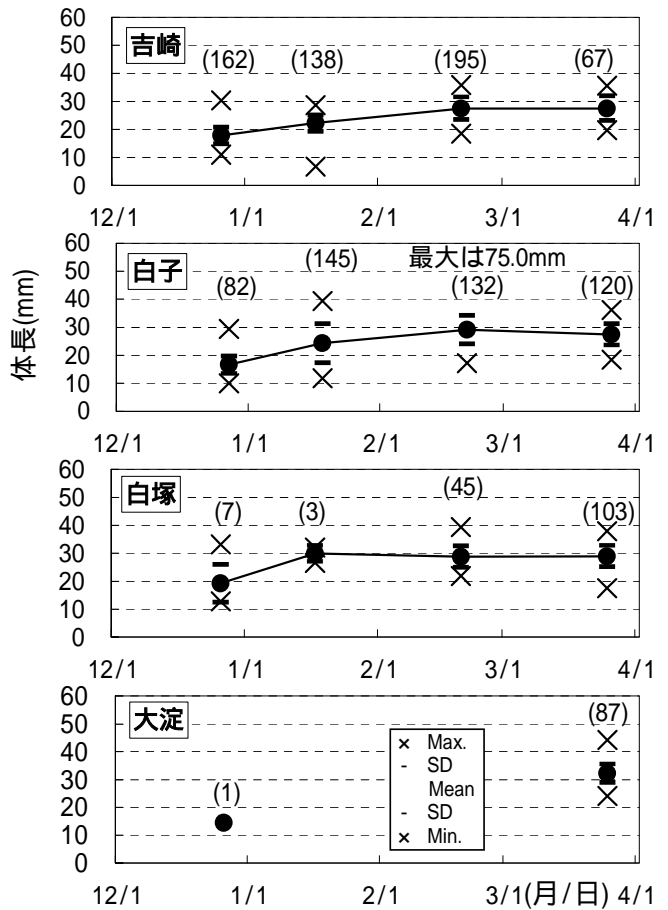


図2. 体長組成の推移

(平均, ±SD, 最大, 最小, ()は尾数)